

令和3年10月1日に思う

何と愛らしい体育すわり（三角すわり）でしょうか。その姿は、本紙先月号で表紙を飾り、私たちの心を和ませてくれました。

2学期が始まり、仮校舎での「対面式」。体育館に集まった子どもたちは緊張と不安の中にも礼儀正しくキチンとすわり、先生をしっかりと見つめる姿は、期待どおりであり、頼もしくもありました。委員会の話しも、小学生たちは「お兄ちゃん、お姉ちゃんをより身近に感じたようで、笑顔も増した」としています。私自身、この報告に安堵しています。

村は「15の春は正夢に」を合言葉に、令和6年春の義務教育学校の開校をめざし、その準備を着々と進めています。このほど関連工事として、川上小学校の解体工事に着手することとなり、おおよそ40年間多くの方々に親しまれた学び舎に歴史の幕を降ろすことになりました。9月24・26日の「旧校舎を見る会」には、多くの方々が訪れ、思い思いに別れを惜しんだと聞いています。

寂しさは当り前のことではありますが、校舎の役割を終えても、そこでの「学び」は着実に引き継がれることは確かであります。ましてや、「学ぶ子どもたちがいなくなり、廃校となった」とは訳が違い、将来の学校教育のあり方を見すえた上で、「教育村・かわかみの歴史をより高みへ」と進化させる最善の策とご理解いただきたいと思います。

改めて責任の重さを噛みしめながら、新しいステージで、次代を担う子どもたちの成長、活動を大いに期待し、胸を膨らませているところです。この子どもたちが大人になり、「私の学びのルーツは川上村にある!!」と堂々と前を見て胸を張る姿を、皆さんと一緒に見たいものです。

引き続き、わが村の子どもたちをあたたく見守るとともに、(私たちには)叱咤激励をいただきたいと思います。